日本遺族通信
令和8年8月15日
第908号

一般財団法人日本遺族会
〒102-0084 東京都千代田区九段南一丁目六番五号 九段会館テラス四階
電話　03－3261－5521
振替　00160-6-25389
編集発行人　重井 敦
毎月1回15日発行
定価　1部130円（税込）

日本遺族会は国の礎となられた英霊顕彰をはじめ、戦没者の遺族の福祉の増進、慰藉救済の道を開くと共に、道義の昂揚、品性の涵養に努め、世界の恒久平和の確立に寄与することを目的とする。

語り部通知

教育委員会・援護担当へ発出

文部科学・厚生労働両省から

7月17日文部科学省は都道府県教育委員会等へ、同月22日、厚生労働省は都道府県援護担当へ平和の語り部事業の積極的利用に向けた通知を発出した。6月に文部科学相、厚生労働相への要望を受けた対応。本通知により昨年度は学校での講話が令和6年度比4倍増となった。学校に加え自治体の追悼式での活用を加えた通知発出を紹介したい。

本会の「平和の語り部事業」が厚生労働省の令和8年度補助事業として採択されたことを受け、水落敏栄会長は6月12日、松本洋平文部科学大臣と、同月16日上野賢一郎厚生労働大臣にそれぞれ面会し、学校教育での語り部の利用を拡大するための事業周知を再度依頼した。

昨年は本通知がきっかけとなり、終戦80年もあいまって学校等（児童・生徒を対象とした学童クラブ等含む）での講話が808回を数え、令和6年度比約4倍と大幅に増えた。

依頼を受けた各地域では児童・生徒の理解を深める内容を模索し、高い評価を得た。

今年度は厚労省に対し、文科省への協力依頼に加え、自治体の追悼式での語り部利用を要望した。終戦から80年余が経過し、遺族の高齢化により参列者が激減する中で、追悼式自体を取りやめる自治体が散見されるが、国策により出征し、犠牲となった戦没者を悼み、継承することが平和学習の基本だとした本会の要望が反映された。他方、追悼式の意義を広く国民に知らせるため、児童・学生等の一般参列者を招待する取組みが行われているが、希望者が少ない状況であり、遺族会として出来る方途を早急に検討しなければならない。

語り部事業は講話・対話・体験型と多様な形態を提案している。学校での更なる推進に加え、自治体の追悼式に参列する児童・生徒に対し「戦没者慰霊」を通した記憶継承に取組むと共に、首長、自治体、教育関係者に対し、本事業の重要性を周知する貴重な機会としなければならない。

本通知を用いて改めて自治体に本事業の利用を要望するなど、本部・支部は一丸となって推進していく。

大阪府内の学校で語り部

遺児友好参加者が講話者へ

昨年度、大阪府では26校の学校講話を実施した。しかし、事務局の高齢化に伴い、調整が困難との申し出を受け、府援護課との相談を経て、令和8年度は本部で調整することとなった。

令和8年当初、8年3月までに13校の依頼を受けていた。府遺族連合会を脱退した地区もあり、講話者の確保が最優先となった。

そこで、令和7年度に協力いただいた講話者に加え、新たに7年度遺児慰霊友好親善事業（以後、遺児友好）参加者に対し、本事業への協力依頼を行い、新たに4人の遺児が仲間に加わった。

あわせて、先進県であり本会語り部ブロックアドバイザーが所属する兵庫県遺族会に協力を仰ぎ、次世代として学校講話に協力する北浦基広会長、荒堀修一アドバイザー（青年部長）の尽力を得て実施している。また近隣支部青年部より和歌山県野井和重青年部長も協力の意向を伝え、県境地域の学校講話を視察し協力。地域をあげ、体験者と次世代が協力し講話を実施。現在13校実施、教育委員会への通知後、新たに10校の依頼があった（8月7日時点）。

○遺児友好参加者

・吉村孝史氏
令和7年度洋上慰霊参加をきっかけに語り部事業に協力。戦艦大和に勤務していた父、母の労苦を令和7年度大阪市制作の動画で伝える。洋上慰霊での感謝を講話で返したいと語る。

・土本初代氏
令和元年度、7年度ミャンマー参加者。本部からの依頼に応じて8年7月初講話。父の遺言、戦後の母の労苦、ミャンマーでの慰霊や学校での交流を講話。

・高倉正達氏
令和7年度洋上慰霊参加者。本部からの依頼に応じて8年8月初講話。父、戦後の母の労苦、洋上慰霊の体験を講話。戦没者の想いを伝え、心に残る話がしたいと意気込み。

・増田正和氏
令和7年度フィリピン参加者。本部からの依頼に応じて8年8月初講話。戦後の母の労苦、父の戦没地比島での慰霊体験を講話。未経験ながら協力したいと意気込み。

○その他協力者

・尾縄伊孝氏
長年枚方市遺族会と共に慰霊碑調査。地元教育委員会での勤務を活かし、慰霊碑から伝える戦没者、地域の歴史、慰霊の大切さを伝える。

○7年度からの協力者

・津村正義氏（遺児）
府理事、松原市遺族会会長。松原市での戦中戦後のくらし、沖縄戦で亡くなった父の辞世の句を披露。

・大森正美氏（遺児）
府監事。高槻市支部長。

・寺尾昌治氏（孫）
岸和田市遺族会副会長。祖母の戦中戦後の労苦、同市遺族会寄稿文を用いた地域の空襲、慰霊碑等の講話。寺院住職としての法話経験を活かし、「気づき」の話。

○近隣支部協力者

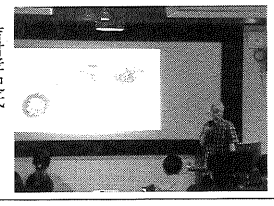
・北浦基広氏（孫）
兵庫県遺族会会長。次世代として遺児と共に兵庫県内の学校講話に協力。沖縄・長崎など修学旅行の事前学習向け講話に取組む。

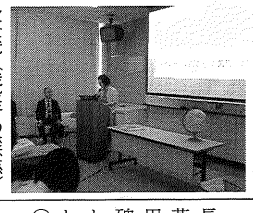
・荒堀修一氏（孫）
本会平和の語り部ブロックアドバイザー、兵庫県遺族会青年部長。加西市の戦中の児童のくらし、加西市鶉野飛行場から飛び立った特攻隊員の遺書から平和の尊さを伝える。

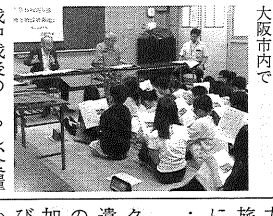
○講話予定者

・愛智良子氏
吹田市女性部長。7年度より協力。

今後、遺児友好参加者による講話見学も予定し、新たな講話者の育成、発掘を重ね、講話内容の充実を図る。


戦中戦後の食糧難を語る＝6月2日、高槻市内で


次世代（戦没者の姪、孫）が語る講話＝6月11日、熊取町内で


慰霊碑から戦争と平和を考える講話＝7月1日、大阪市内で


ミャンマーでの慰霊、学校での交流を話す遺児＝7月13日、柏原市内で

令和8年 熊本地震被災者の皆様に 謹んでお見舞い申し上げます

一般財団法人 日本遺族会

厚労省 総務省 人事異動

厚生労働省と総務省で人事異動が行われた。

【厚生労働省】

▼援護担当審議官
▼援護企画課長　三好　圭氏
高鹿　秀明氏
▼事業課戦没者遺骨鑑定推進室長　左藤　倫子氏（8月1日付）
▼社会・援護局長　野村　知司氏
▼援護・業務課長　生末　明宏氏（8月4日付）

【総務省】

▼政策統括官　七條　浩二氏
▼大臣官房審議官　山村　和也氏（8月4日付）

声なき声

小津安二郎監督の「東京物語」は世界的に最も評価の高い日本映画のひとつである▼戦後日本が復興を遂げてきた時代の老夫婦とその子供たちとの関係を淡々と描いているが、小津の戦没者への畏敬の念が強く感じられる映画でもある▼老夫婦の次男は戦死しており、義理の嫁は再婚しないで一人暮らしの部屋に次男の写真を大切に飾っている▼成長した子供たちに会うため尾道から上京した老夫婦だが、長男や長女の家では厄介者扱いされ、結局縁側に面倒をみてくれたのは次男の嫁だけという切ない話だが、戦没者への思いを通じて血縁関係にない親子がお互いを思いやるしみじみとした場面は涙をさそう▼映画の後半に一瞬「雁来紅（葉鶏頭）」が写るシーンがあるが、これは中国で戦病死した監督仲間である後輩の山中貞雄への哀悼の思いが込められていることはよく知られている。小津自身も中国戦線で戦い、復員しているが、映画監督らしい戦没者を弔う方法である▼8月15日、81回目の終戦の日を迎え、全国から戦没者遺族が靖国神社に参拝し、そして、全戦没者追悼式が日本武道館で挙行された▼日本人として戦争があったことを決して忘れることなく、いつまでもひとりひとりが自分なりの思いを込めた戦没者を弔う日であってもらいたい。（S）

遺骨収集

硫黄島から10柱が帰還

千鳥ヶ淵戦没者墓苑で引渡式

日本戦没者遺骨収集推進協会主催の硫黄島戦没者遺骨収集派遣（第1次）を実施し本会からは3人が参加協力した。7月9日千鳥ヶ淵戦没者墓苑で遺骨引渡式が挙行され、栗原渉厚生労働大臣政務官をはじめ遺族代表、国会議員、関係団体代表等が見守る中収容された10柱の遺骨が派遣団員から厚生労働省へ引き渡された。



天山付近の地表を中心に土砂を丁寧に排土し遺骨を収容する団員＝6月26日、硫黄島で

昨年9月の噴火による降灰の影響で、硫黄島では島内施設が被災し、燃料や水の供給に支障が生じるなど生活環境が深刻化している。このため、今年の硫黄島戦没者遺骨収集派遣（第1次）は、派遣団員の規模を縮小して実施することとなった。

今回の派遣には、本会からの3人を含め、硫黄島協会、小笠原村在住硫黄島旧島民の会、JYMA日本青年遺骨収集団などの団体が参加。総勢18人で構成され、6月24日から7月9日までの16日間にわたり活動した。

派遣団は2班に分かれ、選定された地点で遺骨収容作業を行った。猛烈な日差しと高温の中、団員はすべて手作業で地表や壕の土砂を丁寧に取り除き、細心の注意を払いながら遺骨の発見に努めた。

その結果、滑走路北側の硫黄島中央部周辺の地表で3柱、北部天山付近の地表3カ所で3柱、南海岸付近の新たな壕から4柱の遺骨を収容し、計10柱を確認した。

収容した遺骨は内地へ送還され、7月9日に千鳥ヶ淵戦没者墓苑で厚生労働省へ引き渡された。

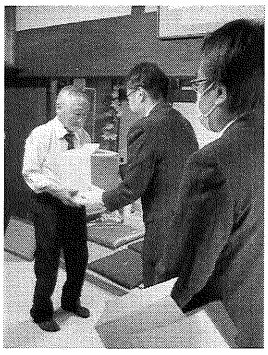
派遣団はすべての任務を終え、解団した。

硫黄島でのこれまでの収容遺骨数は1万790柱となり、戦没者概数（約2万1900人）に対する収容は依然として道半ばである。

本会は今後も推進協会への派遣協力を積極的に進めていく方針だ。

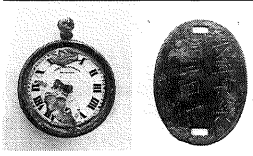
遺族へ返還

ミャンマー戦没者遺骨 DNA鑑定で身元判明



県保護・援護課職員から遺骨を受け取る小山英機さん＝7月3日、飯塚市で

厚生労働省のDNA鑑定により、ミャンマーで収容された遺骨の身元が福岡県飯塚市の小山正夫さんであることが判明し、戦後81年の歳月を経て、長男の小山英機さんの元へ届けられた。



遺骨とともに発見された遺留品の懐中時計と認識票

平成23年に実施された厚労省の遺骨収集事業でメイクテーラ郊外インパレ村で遺骨とともに遺留品の懐中時計と認識票が発見された。この認識票に刻まれていた所属部隊情報等から遺留品が小山正夫さんのものであることを特定し、今年1月に遺留品が遺族に返還された。同時に遺骨のDNA鑑定が進められ、4月に確定し鑑定結果が英機さんへ通知された。

7月3日、自宅で遺骨伝達式が行われ、福岡県保護・援護課職員から遺骨を受け取った英機さんは「みんなずうっと待っていたよ」と語りかけた。

昭和20年3月17日に戦死した父からは、故郷の田畑や家族のことを案ずる言葉が綴られたハガキ69通が届いており、今も大切に保管され、娘の片山愛子さん（戦没者の孫）により書籍にまとめ発刊されている。

英機さんは3月に、戦没者遺児による慰霊友好親善事業で最後の実施となったミャンマー地域に、娘とともに参加した。

英機さんは現地での慰霊祭の追悼文で、これまで家族を見守ってくれた父に感謝し、「戦地から届いた手紙に書かれていた農業改革の精神を受け継いで、40数年間無農薬、無化学肥料の農業をやって来た」と報告していた。

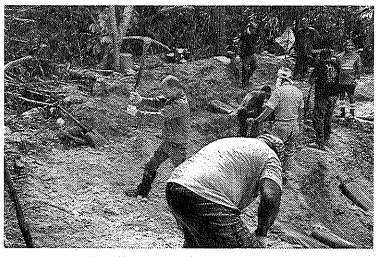
パラオ・マリアナで188柱収容

集団埋葬地での遺骨収集進む

日本戦没者遺骨収集推進協会は6月から7月にかけて、南方地域などで海外現地調査および遺骨収集派遣を相次いで実施した。

本会からはパラオ諸島に2人、マリアナ諸島に2人が参加し、各地域での活動に協力した。

パラオ諸島での現地調査派遣（第2次）は、前半（6月17日～7月2日）と後半（7月1日～7月16日）に分けて計32日間行われた。派遣団はペリリュー島の集団埋葬地（埋葬者数1086人）を重点的に掘削した。同地の地盤は石灰石が多く、80年以上の経過で雨水を吸収して岩のように固まり、掘削は困難を極めたというが、団員と地元住民の協力により171柱相当の遺骨を収容し、DNA鑑定用の検体を採取した。採取した検体は国内に送還するまでの間、ペリリュー州政府にて適切に仮安置されている。



ペリリュー島の集団埋葬地の固い地盤を掘削する団員＝7月10日、パラオで



テニアン第2日本人墓地で遺骨を収容する団員＝7月16日、テニアン島で

マリアナ諸島での現地調査派遣（第1次）は、7月13日から22日までテニアン島で実施された。

これまでの調査で特定された集団埋葬地「テニアン第2日本人墓地（埋葬者143人）」を掘削し、17柱相当の遺骨を収容した。同墓地では今回分を含め計139柱相当の遺骨が収容されており、採取した検体は国内送還に向けて調整が進められている。

なお、今回のマリアナ諸島派遣は、4月に予定されていたものの、同月にサイパン・テニアン両島を台風が直撃し甚大な被害が発生したため延期となり、今回の期間での派遣となった。

DNA鑑定申請

戦没者遺骨をご遺族のもとへ

厚生労働省では、旧戦域で収容し送還された遺骨で、遺留品等がなく身元の手掛かりがない戦没者遺骨の身元を特定するためのDNA鑑定を、同省が検体（遺骨からDNAを抽出することに適した骨の部位のこと）を保管している全地域を対象に実施している。

申請方法、手続きの案内、申請書は同省ホームページからダウンロードできる。

なお、遺族からの申請手続きに関する電話等での相談は下記のとおりである。

厚生労働省社会・援護局事業課戦没者遺骨鑑定推進室DNA鑑定担当
03・3595・2219
dnakantei@mhlw.go.jp



厚労省

政府主催 慰霊巡拝のお知らせ

厚生労働省が主催する慰霊巡拝の実施計画概要が同省ホームページ（「厚生労働省」「慰霊巡拝」と検索）に掲載されている。

参加資格、申込方法及び実施時期等の詳細は、在住の各都道府県庁の福祉部又は援護担当課までお問合せ願いたい。

令和8年度 慰霊巡拝実施計画概要

派遣地域	実施予定時期	実施期間	募集人員	締切
フィリピン（第2次）	2月17日（水）～26日（金）	10日間	40名	9月18日（金）
中国東北地方（旧満州地区全域）	3月15日（月）～26日（金）	12日間	15名	11月16日（月）

※実施時期、期間等は、相手国の都合等により変更することがあります。
※募集は各都道府県援護担当課を通じて行っており、募集締切は実施予定時期の概ね4か月前となっております。

令和8年度 日本戦没者遺骨収集推進協会主催
現地調査・遺骨収集実施表

＜海外＞

派遣名	実施地域	実施期間	本会参加人数
ミャンマー現地調査 第1次	メイクテーラ	5月31日～6月10日	1人
インドネシア現地調査・遺骨収集 第1次	ワクデ島	5月31日～6月13日	2人
パラオ諸島現地調査 第2次 前半	ペリリュー島	6月17日～7月2日	1人
パラオ諸島現地調査 第2次 後半	ペリリュー島	7月1日～7月16日	1人
タイ現地調査	メーホンソーン	7月12日～7月22日	1人
マリアナ諸島現地調査 第1次	テニアン島	7月13日～7月22日	2人

本会事務局で辞令交付

本会事務局では、8月1日付けで辞令交付を発令した。（敬称略）

▼語り部事業本部・福祉事業部 部長 栗田和彦

語り部事業

第17回定期講話会

家族の記憶から考える記憶継承

戦争体験者の遺族と次世代が共に記憶の伝承に取組む本部主催第17回定期講話会。7・8月は昨年に続きテーマは「家族」とし、「家族の記憶から考える記憶継承」を次世代が講話。参加者の大半が次世代・学生となった今回、次世代、体験者それぞれが記憶継承の方途について活発な意見交換がなされた講話・座談会を伝えたい。



学校講話で感銘を受けたと話す熊谷市小学校校長（左から2人目）と講話のもととなった創作絵本への想いを伝える栗原志功氏（手前右）＝7月11日、九段会館テラスで

7月11日の第17回定期講話会テーマは「家族の記憶」。次世代が継承する方途について高知県青年部の遺児の記憶聞取りから朗読劇への発展、戦地からの手紙動画制作等の取組み、体験者の取組みとして金沢市遺族友の会の絵本制作が紹介された。

金沢市遺族連合会柴田勝弘会長は戦時中空襲被害がなかった石川県だが、県内から出征し亡くなった多くの戦没者や、遺族等の戦後の労苦を伝え、平和について考えてほしいとする制作意図を説明。喫緊の課題は次世代の育成。今年度市役員の半数を次世代へ組織改編。金沢市内10校で講話を予定。講話には次世代が同行、育成を図り次年度からは次世代も講話に加わる予定と意気込みを話した。

次に次世代の講話。栗原志功埼玉県遺族連合会青年部副部長は祖母の記憶から伝える講話。

幼稚園の送迎。祖母は自転車で急こう配の坂道を前に「こんなくらいなんだ！」と大きな掛け声で漕ぎ続けた。社会に出て困難にぶつかる度、祖母の力強い言葉を思い出し乗り切れた。戦後を生き抜いた人の強さだと称えた。また幼少期に聞いた「空襲警報発令」の掛け声に驚愕したことを加え、熊谷空襲に纏わる話を創作。

熊谷市街地を流れる星川の今昔。終戦前夜昭和20年8月14日から15日にかけてB29が89機飛来、炎の中、人々は星川へ。火が付いたまま飛び込んだ様子は「星川に火が付いた」と言われたという。266人が死亡、負傷者3000人、市街地の3分の2が焼失。玉音放送にあと1日終戦が早かったら「と落胆。しかし、人々は懸命に働き熊谷は復興した。焼け跡に咲いた花は生き残った人が亡くなった人の思いを背負い育てた希望だと語り、「焼け跡に咲いた奇跡の花」とする創作歌を熱唱。戦争で家族を失った遺族として伝えたい。知識も重要だが「伝えたい」気持ち、感情に訴えようと語った。

座談会では、先月に続き次世代が記憶を継承する方途について話し合い、「家族から聞く」（次世代）、「母からは聞けなかった。話したくないほどの記憶」（体験者）、「戦争の史実に加え、感情を伝えることも大切。伝える側に立つ心構え。軍靴の音を待ちわびて、お腹の中で父の記憶がない、想像もつかない」（次世代）などの意見があった。

8月も「家族」をテーマに次世代による遺骨収集の講話を予定。次々回は、9月12日予定。

平和の語り部　多様な形態　全国で



体験者と次世代が朗読劇を上演＝7月1日、新潟県で

「平和の語り部」の多様な形態を模索する各地の取組みを紹介したい。

○新潟県7月1日

戦没者遺児の集いを開催し、語り部研修を実施。体験者、次世代の体験型として朗読劇「出征兵士を見送る家族の物語」が披露され、今後研修会に加え、自治体の追悼式等での上演を目指そうと呼びかけられた。その後、本部から新潟県内の取組みに加え、全国での取組みが紹介され、参加者一人一人が語り部になってほしいと説明された。

○島根県7月3日

雲南市戦没者追悼式、関連する資料展示会、平和講演を開催。同市は長崎原爆で被爆しながら救護、復興に尽力した医師永井隆博士の故郷として平和都市宣言をしており、同市はかねてより雲南市遺族会の精力的な活動を理解し後押し。市遺族会は平和活動として「平和の語り部」を約15年前から実施。市内全ての小学校に出向き、戦没者の遺児、兄弟が講話。復員した体験者が体を貫通した弾痕や、命を救った鉄兜等を見せる、忠魂碑前での講話など内容を工夫。近年は次世代の育成に取組み、体験者の講話内容を次世代が改良し実施。

また追悼式を貴重な機会と捉え、市の理解、協力を得て市内小学校の1クラスを招待。代表児童による献花や、参列児童に資料展の説明などが行われている。



追悼式展示資料を説明する難波幸夫雲南市会長＝7月3日、島根県雲南市で

島根県遺族連合会は先進事例として同市追悼式県連企画を昭和100年記念事業とし、同日は県内各地から役員、会員が参集。雲南市の取組みを研修した。

○岡山県7月17日

靖国神社みたままつりにあわせた上京研修会。講師は逢沢一郎遺家族議員協議会会長。国会最終盤の多忙の中駆けつけた。冒頭毎年終戦の日には靖国神社に参拝し、英霊に哀悼を捧げ、戦争の悲惨さ、平和の尊さを胸に刻むと話した。そして遺族会が取組む平和の語り部事業の「体験者が直に伝える」貴重性を称え、記憶継承の先頭を走り続けてほしいと語った。

また、祖父逢沢寛氏（本会初代副会長）から聞いた話として、自宅に被弾し逃げた方向によって命拾いした岡山大空襲、学徒出陣でルソン島において戦没した祖父の兄を語り、貴重な記憶を次世代へ伝える語り部、追悼式、国内外の慰霊碑の維持管理、遺骨収集等、国として取組む決意を語った。

その後、昭和館を視察し、児童・生徒に伝える内容を研修し帰途に着いた。



岡山県上京研修会で講話する逢沢一郎遺家協会長＝7月17日、九段会館テラスで

モンゴルで移設・埋設

海外民間慰霊碑移設等事業

日本遺族会は、厚生労働省から委託を受けて実施している「海外民間建立慰霊碑移設等事業」をモンゴルにおいて7月5日から10日にかけて行った。

水落敏栄会長ら2人が現地に派遣され、昨年度の調査結果を踏まえ、ウランバートル市内の慰霊碑1基を移設し、ホジルプラン市の慰霊碑1基を埋設した。

6日、日本政府が建立した慰霊碑の維持管理を担うモンゴル赤十字社を表敬訪問し、ボロルマー事務局長らと面会した。

協議では、対象慰霊碑である「観音像」が政府慰霊碑敷地の本碑後方に設置され、参拝者が本碑に正対した際、本碑の空洞部からあたかも観音像を参拝する格好になってしまう現状について意見交換し、政府慰霊碑敷地内の資料館隣に移設することで合意した。

一方、ホジルプラン市の慰霊碑は、かつて抑留死亡者の埋葬地に建立されたもので、遺骨収集は既に終了している。現在はモンゴル国軍の演習場となっていることから、7日には同演習場を管轄する国防省を表敬訪問し、テルムーン少佐らと面会した。

水落会長は、昨年の調査で慰霊碑を参拝する人がなく、演習場の射撃の的となっている現状を「遺族として忍びない」と述べ、役割を終えた慰霊碑を丁重に埋設したいとの意向を伝えた。これに対し、テルムーン少佐は「私たちが逆の立場であれば同じ気持ちになるだろう。軍の管轄地で調整は容易ではないが、全面的に協力したい」と応じ、同日中に軍側の許可を得た。



埋設した跡地に花を手向けて手をあわせる水落会長＝8月7日、ホジルプラン市で

翌8日、ホジルプラン市の軍演習場を訪れ、指揮官バトムンフ中佐らの立会いのもと慰霊碑を埋設した。埋設後、水落会長は慰没者慰霊碑跡地に花を手向けた。遺族の心情を理解し、迅速な対応をしたモンゴル軍に対し感謝を伝えた。

本会への賛助金のお礼

本会の活動に賛同し、賛助金を寄せていただいた下記の方々に対し、心よりお礼申し上げます。

なお、賛同者の都道府県名については、送金方法により居住地が特定できない場合があるため、省略します。

賛同者名（敬称略・カタカナ名は銀行振込、漢字名は現金書留等）

木森啓子、稲田定彦、中川義弘、赤澤壽子、稲木実、秀平良子、酒井治利、楠本武、平野敏雄、キクチアキオ、オオニシミヨジ、ヤマダヨウイチ（以上、7月1日から7月28日現在）

皆様からいただいた賛助金は、本会が実施している英霊顕彰、戦没者遺族の処遇改善、戦没者遺骨収集事業等のさまざまな遺族会活動に利用させていただいています。

日本遺族会への賛助金のお願い

日本遺族会では、戦没者の英霊顕彰や遺族援護、慰霊友好親善事業、遺骨収集帰還等各種事業の活動のために賛助金を募っております。

本会の活動の趣旨にご理解を賜り何卒ご賛同いただきますようお願い申しあげます。

●郵便振替　00130-2-69929

●みずほ銀行　九段支店　普通預金　0980930

※口座名は…一般財団法人日本遺族会ヤサイ　ニホンイゾクカイ

ミャンマー小学校修繕募金へのお礼とお願い

日本遺族会がミャンマーの現地に寄贈した小学校3校の老朽化が進んでいることから、その修繕費用を集めるために開設した「ミャンマー小学校修繕募金」にご賛同いただいた左記の方に心よりお礼申し上げます。

賛同者名（敬称略）

ツネカワトシオ（7月1日から7月28日現在）

本会は引き続き現地の情報収集に努め、渡航について安全が確認され次第、小学校の修繕に取り掛かることにしている。

語り部事業 学校講話

生徒発信型 新たな形態
東京・北区立桐ヶ丘中学校で

戦没者遺族の記憶と地域の歴史を伝える遺族会の語り部は、全国から依頼を受け実施している。学校からの要望に沿った内容となるよう各支部は創意工夫を重ねている。この程、3年間の平和学習の総まとめとして、生徒進行による発表、質疑に講話を加えた新たな形態が実施された。遺族会の語り部の更なる可能性を示す取組みを紹介したい。

7月7日、都内北区立桐ヶ丘中学校3年生で語り部を実施した。当初より4組全8グループに講話者総数9人を派遣。生徒による進行、発表に講話、生徒全員による質問、対話型の希望であった。要望を受け東京都に加え、千葉県、埼玉県各遺族会へ協力を求めた。

学校では1年生より平和学習を開始。「復興」をテーマに横浜、山下公園等を視察。港湾都市としての役割を学習。2年生では都内関係施設として靖国神社遊就館を視察後、昭和館、しょうけい館、平和祈念展示資料館、東京大空襲・戦災資料センターを選択制で班別視察。戦時中の兵士や銃後の国民の暮らしを学ぶ。3年生では5月に広島へ修学旅行。平和学習の総まとめとして、7月本事業を利用。

生徒の進行で全員の自己紹介、グループ代表、3班に分けた発表、語り部を聴講後、一問一答の質疑。発表は3年間の学びについて。戦争の犠牲の上の平和、当たり前ではない平和、次世代への継承が写真や資料を用いて分かりやすく説明。

講話者は東京都持田幸男氏、岡野利幸氏、中村正弘氏、松丸留美氏、能美松江氏、埼玉県福居一夫氏、岡部博明氏、千葉県横田智江氏、宍倉操氏。

授業後寄せられた感想を一部紹介する。「体験者の話を聞いて実際に起こった悲劇だと認識」、「3年間の学習の内側を学べた」「親元で育てる、ご飯が食べられる『当たり前』ではない」、「平和を願うだけでなく、口に出して訴える」、「バシー海峡＝船の墓場と知った」、「平和を守り続けるために私達は学び、考え、伝え、行動していくべき」。

これまで双方向、多方向型を目指してきたが生徒発信型の形態は大きな学びの機会となった。今後も学校の要望に応えられるよう努力を重ねたい。

初めてだったことを受け、野井和重青年部長を中心に準備。学校での打合せを前に近隣支部の学校講話を視察し、内容を研究。結果、低学年児童にも理解できるように朗読劇「出征兵士を見送る家族の物語」、兵庫県荒堀修一アドバイザー実施の加西市デジタル紙芝居「机のない教室」（戦中戦後の児童のくらし）、和歌山市の戦中・戦後の話、質疑応答の4部構成となった。中でも朗読劇は、児童に興味を持ってほしいと教員に参加を依頼し、8人に協力いただく。

当日は野井部長、長坂隆司青年部員（県議）の二人で対応。新たな挑戦は大きな評価を得た。

○7月13日富山県

富山市立四方小学校での講話。当県では富山空襲の語り部活動が活発で遺族会への依頼が少なく、来る日に備え学校での講話内容の研修に取り組んでいた。

7年度末の文科省から教育委員会への通知を受け、県内2校の依頼を受けた。特に富山市は初めての依頼となり、山本甚克会長、中川祐吉事務局長、湊川志穂子局員の3人で対応した。

当日は5・6年生に対する講話を実施。地域に焦点を当てた話として、山本会長、中川事務局長が戦中戦後の体験や慰霊巡拝等の体験から戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝えた。

○7月18日広島県

広陵高校全校生徒1300人への講話。本年1月の依頼以降、過去最大規模となることから広島県遺族会と慎重な協議を続けてきた。当県は平成27年特別弔慰金支給法の附帯決議を受け、戦没者記録事業として同年から令和元年度まで「戦没者を語る会」を開催し講師80人の動画を収録している先進県である。

他方、原爆投下を受けた県であり特に広島市において平和学習は被爆者団体への依頼がほとんどであったが、今回初めて依頼を受けた。

そこで広島市遺族会増川計会長（県副会長）がこれまで組織向けに語ってきた戦中戦後のくらし、父への思いを生徒向けに再構成し、実施に向け、増川会長、檀谷敏治事務局長は学校で打合せを重ねた。

講話は3階建てのホールで実施され冒頭、校長先生より体験者の生の証言が聞ける貴重な機会への謝辞が述べられた。

増川会長は講話のはじめに遺族会、慰霊碑のいわれを伝え、「原爆に加え召集により旧戦域で戦没された方々がいることを知ってほしい。大人だけでなく、子供も否応なく巻き込まれる戦争を絶対に起こしてはいけない」と力を込めた。

当日は市遺族会より多数応援に駆け付け、講話後は、各々自身の体験を語り、学校講話に向けた準備に取組もうと話し合われた。



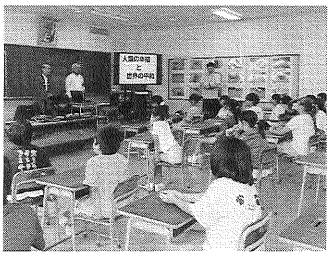
生徒代表による３年間の平和学習のまとめに聞き入る講話者＝７月７日、北区桐ヶ丘中学校で



最大規模となる約1300人の生徒に戦争の悲惨さ、平和の尊さを訴える＝７月18日、広島市内で



学校の教職員による朗読劇の上演＝７月７日、和歌山市内で



初めて依頼を受け小学校での語り部講話を実施＝７月13日、富山市内で

愛しきものへ

感無量

陸軍兵長　小川　新次

昭和十九年十二月二十二日
フィリピン・レイテ島ブラウエンにて戦死
静岡県庵原郡袖師町出身　三十三歳

九月五日午前二時十分営門出発
午前二時三十分発車
元氣にて大陸の北支（大同ヨリ）包頭に行く。
留守中何分子供を大切に氣をつけて呉れ。
母上父上様に呉れ〳〵も宜しくお傳へ下さい。
お前も身体を氣を付けて、俺の帰りを待つて辛棒して呉れ。
此れから先、涼しさ加はる折、十分と呉れ〳〵も頼む。
書き度事澤山あれど感無量。
兄さん、姉さん、妹達によろしく傳へ下さい。
皆々様の御健康を御祈り申し上げます。
静岡駅より博多―朝鮮―漲洲―張家口―大同包頭
大同と包頭に二班に分れる予定

新次より

千代子江

【令和八年八月靖国神社社頭掲示】
愛しきものへ

九段短歌

作品をお寄せください。

選者　村田　信昌

海ゆかば流るる町の追悼式平和の誓い六百四十七柱

山形県　菊地　幸子

サラモアの地名は生涯忘れえず父は帰らず眠りし地なれば

最後なる洋上慰霊に参加して戦争の歴史新たに学ぶ

東京都　黒岩　しま

千葉県　齋藤　康代

八十路の身好きに人生送ったが戦死の父に会いたかったなあ

富山県　酒井　映子

人の世に征きて帰えらぬ父思う語りたきことすべもなく

兵庫県　池田喜代子

ミャンマーの父戦没跡遺骨調査鑑定を待つ八十路遥かに

大分県　安藤　幸枝

この年は玄孫も参加の神楽祭流るる調べ父も聞きませ

佐賀県　松尾美津子

「元気です」ただ一行の葉書にて父の覚悟の見えかくれしと

長崎県　安原　恭子

◇

年々暑さが厳しく感じられるのは年齢のせいでしょうか。皆様方には酷暑の折柄呉々もお身体ご自愛下さいませ。さて、今月の九段短歌には新しいお顔触れの出品者が数多く大変嬉しい限りでございました。

九段短歌はお歌の巧拙もさることながら、同じ思いを皆様で共有する事にこそ意義があるものと感じております。今後も振るってご出稿をお待ち致しております。

（選者）